

末黒野

すぐろの

6月号
(通巻910号)



百千鳥

森清堯

薄氷や枝もて突く子触れゐる子
黒塀の裾にはじけてクロツカス
春雨や濡れてはならぬ書をかかへ
差し伸ぶる釣り竿の先猫柳
がら空きの里の碧空辛夷の芽
図書館へ急ぐ返却卒業子
木洩れ日に鯉の顎や水温む
池の日の届く傾りやつくしんぼ
梅東風やゆるやかに鯉動き初め
園児らの遊戯を囃し百千鳥
チューリップ英語の混じる人だから
点晴の白帆のひとつ春の海

辛夷の芽

岡野里子

カーテンを透け春朝の日矢一条
冴返る道路工事の点滅灯
穴を掘る工夫の背や春の月
連れ立てる友みな牛歩梅日和
ゆるゆると春汲み上ぐる釣瓶井戸
山の気を廻す水車や辛夷の芽
花種を蒔く笠雲は遠山に
初蝶を追ふや河原の石に坐し
笹舟の躓く流れ水温む
朝の日へ寸をもたげて松の芯
小流れの音の弾みぬ花馬酔木
落椿苔の石段狭うして

始めての靴

黒滝志麻子

(顧問)

久々の友と出会へり梅見茶屋
 うすうすと山々暮るる木の芽どき
 朝東風や海へ張り出す雲一朵
 白鳥の引く大空の深さかな
 うららかや始めての靴一步二歩
 尾ひれより目覚むる鯉や水温む
 潮の香の強き夕風春の星
 鉢植系にいのち燃やせりチューリップ

甲矢集

春へ

田中臥石

おこぼれのバレンタインデーの菓子
 春耕の田へ出勤の長屋門
 耕耘機操る婿や黙礼す
 叱りをれば娘反論春裕
 菜の花へかぶさる桜地方線
 菜の花の電車大多喜城を往く
 山寺の鐘撞きをれば散るさくら
 中天の雲雀のこゑや田の向かう
 田の隅に一かたまりの余り苗

桜東風

森清信子

石投げて薄氷の池覚ましけり
 鳥声の丘渡りゆく遅日かな
 幾重にも枝先分かれ枝垂梅
 初燕光こぼして翻る
 光ごと芹を摘みたり水奔り
 啓蟄や靴を磨きて籠りゐる
 春水の池底見せて金の鯉
 海へ向く少女の像や初蝶来
 アネモネや神保町の喫茶店
 林泉へ出入り自由や孕猫

品濃一里塚

石黒興平

幹裂けて老梅なれどふくよかに
清晨や昨夜の春雪残る路地
能天氣の時に良きもの霾ぐもり
淡雪をうつすらとどめ粽笹
紅白の梅を左右や二の鳥居
マンション背に芽吹き品濃一里塚
春泥を撥ねて奔馬のいななけり
奥の間の雛の華やぎ合掌屋
奔流となりてきらめく雫解川
鴨引くやもやふ置舟影の濃く

啓蟄

菅野日出子

外灯の裸電球冴返る
舗装路の寸土華やぐ犬ふぐり
家二軒立つ生家跡梅香る
ゆつくりと流るる雲や梅日和
豆雛を飾りて齡忘じけり
啓蟄やバスのどこかで鳴るスマホ
啓蟄やバッグの底のはつか飴
穏やかなる苑の日差や鳥交る
物忘れ恐るる暮し亀鳴けり
久々に研ぐ包丁や初鯉

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



杖の音 長尾タイ

幾度も越せぬハードル涅槃西風
対岸の寸土に芽吹く露の臺
八重野梅膝にやさしきチップ徑
梅探る母の遺愛の杖の音
地に低き纏るる蝶や風硬く
石鹼玉追ふ子の十指宙を切る
カート籠そつと載せたる草の餅

紅枝垂 大川暉美

すかんぼ 今村千年
駒返る草にしばらく寝転びて
すかんぼや子等の歩みの遅々として
童咲き駅への徑は遠くなる
存へてこの世は楽し木の芽徑
そこだけに風の流れて柳の芽
ふくよかになりて幸せ花大根
亀鳴くや百まで生くる志

花の兄の匂ひ立ちたり朝の風
暖かや無口の夫のあやす稚
薄紙に包むかんぼせ雛納
遙かまで畑のさみどり春キャベツ
万蕾の一輪ほどけ紅枝垂
百畳の本堂暗し春寒き
花あせび震はせる風ビプラート

落城の委細は問はず山笑ふ
 しろがねの帆柱浮び海おぼろ
 足の爪切つて踏絵の島に立ち
 古民家の歴史は知らず官女雛
 土雛や精米中の水車小屋
 雛飾る顔は昭和の燐寸棒
 開発の予定の谷戸や蝌蚪の国

春の雨

岡田史女

梅林や踏み入る土のやはらかき
 水温むゆるき魚影を水底に
 学舎のピアノの聞こゆる春の雨
 貝母咲き近づく重行先生忌
 春分の光へ手足投げ出せり
 鶉色の夕日落ちゆく春田かな
 菜の花や堰に渦なす水の音

鬼門より硬き風入れ鬼やらひ
 連れ立つや二月礼者と今半へ
 過疎の村へ若き移住者金縷梅
 通ふ猫片目つぶして諦めず
 日溜りや今朝おとなしき猫の妻
 潤みゆく目や高高と春北斗
 風車まはして生れかはる風

闘鶏

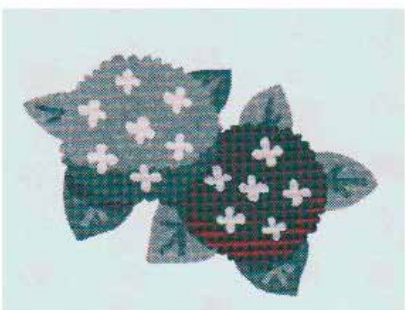
加藤静江

闘鶏の砂蹴る強さ笑む翁
 古民家の淡き日差や白障子
 春立つや撒餌の騒ぎ神苑に
 白鳩の群るる神木余寒なほ
 春浅し空と解け合ふ水平線
 臘梅の香りの届き長屋門
 浮島のかすかなる揺れ春の鴨

四温晴

高木邦雄

松籟の磯の小径や四温晴
 野焼果つる長き堤や茜雲
 漣の隅田の川面春灯
 手づくりの露味噌添へて越の酒
 との曇る矢切の渡し鼓草
 山門の眼下縹の春の海
 隠沼の心許無き初音かな



青炎集

森清

堯選



横浜

六崎正善

横浜

池谷鹿次

春暖の眩しき海や岬馬

雀どち春の光となりて発つ

朝日影谷の巖の落椿

鳥声を探す秀つ枝や風光る

春塵やや湖心へ向かふ漁舟

待合の時計の遅れ春の暮

滝道を寒行二人草鞋掛け

竹林をゆさぶり通し風二月

麦踏の行つたり来たり影ふたつ

大寺の入相の鐘おぼろなり

熔岩の台地名草の芽吹きたり

陽光のあまねく島や海猫渡る

横浜

宮元陽子

横浜

上月智子

日溜りの群るる羊や春浅き

ふらここや横の童のライバル視

春霜や土手一面の薄化粧

雨の中目の色変へて恋の猫

庭梅や番の鳥の散らす花

鷹鳩と化すや鎌倉武士の墓

ポタージユに散らすクルトン春遅遅と

蜜を吸ふ鳥の無心や梅真白

傷つきて大樹の根方恋の猫

長き髪きりりと束ね受験の子

髪に触れ冠に触れ雛飾る

春雪の薄墨色の日暮かな

横浜

新倉ゆき江

川崎

平澤

侃

小指ほどの地を揺るがして露の臺

コピー機の壊るる夜の余寒かな

躓いて作るたんこぶ春浅し

黄水仙猫背の影の曲線美

朝東風やミルクココアに平和の輪

虫眼鏡覗き芽吹きの二重三重

麗かや問ひに立てたる指二本

單車なほす倅五十路やクロッカス

心做し早き飛来の古巣かな

踏み入るや仙石原の野火の跡

祖母の雛嫁に行く者行かぬ者

跡継ぎの畑の足袋跡春の土

横浜

谷貝美世

横浜

山口郁子

干大根暮色のせまる軒の下

走り根に脚をとられて臥竜梅

ぽつかりと黒き山肌雪崩あと

春風のさ迷ふ苑や鳥の声

ベビーカーの保育児五人春の風

春風や池盛り上がる鯉の群

下萌や土和らぐも風硬く

春川の鯉のあぎとふ水輪かな

傾ぎたる古巣揺さぶる疾風かな

声音変へさまよふ闇夜猫の恋

古の雅にひたり雛かざる

花求め敬老パスの小さき旅

横浜

佐々木永子

目黒

五十嵐貴子

昨日雨や紅映ゆる牡丹の芽

水温む日差し吸ひ込む大真鯉

町川の流るでもなし柳の芽

木の芽和使ひ慣れたる小播鉢

満りたる池面や赤き落椿

桃の酒こつそり月と酌みかはず

見て見るとペダルを踏む子日脚伸び

路の羂小さき虫を伴へり

うららかやキッチンカーの幟立ち

憂き春や疫病禍地震と戦まで

三月や祈ることまた一つ増え

声変はりの兆しのかすか卒業子

耕 土 集

岡野 里子 選



夕富士と雅楽の調べ初社

横濱 廣部 尚美

ぬばたまの冬満月や波の音

春立つや朝の光の木々の色

矢の如く過ぎし来し方雛飾る

春光や十年振りの友と会い

心地良き眠り遮る猫の恋

投げ入れの素焼きの瓶や金縷梅

平和つてこんな日のこと春の海

夕暮や空へ辛夷の花明かり
草萌やピアノに弾む小さき指

妻のこと娘と語り雛飾る

横濱 杉山 善信

啓蟄や鎌倉行きの日取決め

横濱 佐藤 勝代

春の海三年叶はぬ里がへり

隣家より子の歓声としやぼん玉

春禽や明けの明星際やかに

俯きて接種待つ人春の服

彼岸会の散華や点す絵蠟燭

老梅の支柱新し咲く一花

何事も常に掛け声初桜

父と子の視線はスマホ花の下

風吹くや浮きつ沈みつ落椿

横濱 森 由佳

スマホ手に床屋の列や春休み

横濱 梅野 宏子

サツシ屋のひび割れの指春浅し

三味線の切るる二の糸春一番

ふうはりと光を巻いて春キャベツ

雛祭り等忙しく習ひ事

ラジコンの遠く近くや風光る

密避けて消毒検温納税期

歩く毎胸膨らみぬ木の芽道

大切な家族と答へ卒業す

綺羅纏ふ妖精舞ふや春の花舗

横濱 岩崎 藍

朝食や潮の香残る蒸蝶

横濱 鈴木 千恵

若桜朝清む園の水鏡

囀や姉妹の語る里ことは

客迎ふドアのリースやミモザの黄

雨戸繰り日脚伸びしと思ひけり

金鳳花シルクの軽さ歩の軽さ

金縷梅の色や光や癒さるる

木々芽吹く杖を頼りの散歩道

日差し受け並ぶ雛のおちよぼ口

里山のふくらむ色や春隣

横濱 西 計郎

長長の臨時停車や春寒し

川崎 木村 純子

ひかる川山に抱かれ日脚伸ぶ

羽田への橋開通や猫の恋

遠富士の裾野ひろぐる雪解かな

春一番上着の襟のはためきぬ

青空へ河津桜や緋をむつみ

休園や卒業式を待つばかり

菜の花やのぼりくだりの三浦崎

晴れの日や素顔を覆ふ卒業子

境内の百の灯籠春の風

狭山 小山すみ子

春疾風鳶巻き揚ぐる三崎口

横濱 平田 きみ

山歩くヤツケ色々風光る

潮溜りの草を啄む春の鴨

立金花眩しき色や春日和

手始めの菊の芽分くや土弄り

露味嗜やしレシビ頼むと子の電話

プレートに記す由来や若桜

山笑ふ見上げて抱く杉太き

マスクして市歌うたふ子ら卒業す

誘はるる儘の遠出や梅見頃

狭山 山中 ミツ

コーラスやマスクの下の声は春

横濱 平野 秀子

鶯餅茶請けの皿の有田焼

舗装後の道路の轍春日さす

除菌するドアノブ光り山笑ふ

予防接種に連なる列や春一番

抱へ込む郵便物や春時雨

春の日やもみ合ふ鯉を見下して

独り立ちする子の一日うららけし

木のもとの苔鮮やかや春の雨